本多の狐

【徳川家康の秘宝】

羽太雄平

Hata Yūhei

|著者|羽太雄平　1944年、台湾生まれ、東京育ち。広告会社社長を経て、現在栃木県今市市在住。庭を流れる小川にヤマメが住む環境の中、小説の執筆にうちこんでいる。趣味の家具作りは玄人はだし。日本推理作家協会会員。本作品「本多の狐」で第二回時代小説大賞を受賞した。

本多の狐（ほんだのきつね）　徳川家康（とくがわいえやす）の秘宝（ひほう）

羽太雄平（はたゆうへい）

© Yuhei Hata 1995

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1995年1月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。　(庫)

ISBN4-06-185865-3

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

本多の狐

徳川家康の秘宝

羽太雄平

講談社

目次

序　章　叡山再興　5
第一章　出羽守乱心　18
第二章　闇の廊道　45
第三章　李朝活字奪還　77
第四章　横手囲い屋敷　118
第五章　上野台脱出　153
第六章　出羽上ノ山　184
第七章　おどけ肥前守　217
第八章　七里結界　243
第九章　但馬守の選択　275
第十章　西の丸炎上　303
第十一章　式年遷宮　327
終　章　神の子生誕　346
あとがき　357
解説　山村正夫　359

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

単行本は一九九二年一月　小社刊

序章　叡山再興

雲が飛んでいた。

低く分厚い雲が隊列をくんで南から押しよせ、揉みあい押しあいしては、横なぐりの雨を落とし北へ北へと飛んで行く。

昨夜から京都を襲った南の烈風は、激しい雨をともなってまる一日吹きとおし、狂ったように走って山なみにぶちあたる。京の北に位置する比叡山は、南から吹きつける烈風をまともに受けることになった。

そんな比叡山へ京から通じる雲母坂道を、ひとりの男がのぼっていた。蓑笠に身をかため金剛杖をついた男で、蓑の下から法衣がみえる。僧侶のようだった。

岩だらけの山径は雨をあつめて滝のように流れ、いたるところで寸断されていた。僧は倒れた杉の大木をのりこえ、くずれ道をとびこえて山道をすすむ。たしかな脚はこびであったが、杖をもつ手は褐色にひからび、なにより顔には、深いしわが縦横に走っていた。かなりの齢をかさねた老僧のようだが、息の乱れは感じられない。

老僧の背後に、あらい息がつづいていた。蓑笠、金剛杖は老僧とおなじ身支度のいずれも屈強な体格の一団で、老僧の護衛にあたっていると見えたが、老僧との差は縮まるどころか、さらに開いていくようだった。

雲母坂道をのぼりつめると道は分岐して、左は北谷から黒谷へとつづき、右は東塔のある南谷に通じている。老僧は足をとめて、さすがに息を吐きだした。

「大僧正、どちらを先に……」

ようやく追いついた後続の一人が、あらい息をついて聞いた。襟もとからむれた汗が湯気となって立ちのぼり、開かった蓑のあいだから結袈裟がみえる。修験行者の扮装である。

「南谷へ」

老僧は短く言った。

「根本中堂でござりますな」

と修験者が念をおすが、老僧はそれにはこたえず、右におれて歩きだす。あわてたように修験者の一団があとを追った。

その道を行くと、ほどなく杉木立のむこうに伽藍がみえてくるはずだった。天台宗祖最澄が創建した一乗止観院のあとに建てられた根本中堂で、比叡東塔の中心であり、天台宗の象徴ともいうべき建物だ。正面十一間、側面六間の大堂を、叡山独特の栩葺きの回廊がぐるりとかこみ、唐破風の正面入り口、そして中堂も回廊も、これまた叡山朱とよばれる丹朱がほどこされた壮麗な建物だった。

その根本中堂がない。正確には崩れおちていた。屋根の栩板はのこらず吹きとび、根元から倒れた老杉が、回廊を圧しつぶし、中堂はそのあおりを受けたように倒壊していた。

寛永八年八月（一六三一）。畿内を襲った暴風雨は、比叡山延暦寺に大きな被害をもたらしている。元亀二年（一五七一）織田信長の全山焼討によって壊滅的な打撃をうけた延暦寺は、その後、秀吉や家康の保護をうけて徐々に復興しつつあった。だが、この年の風害は、再建まもない根本中堂、大講堂、文殊楼といったおもな建物を根こそぎ倒壊させている。延暦寺は三塔十六谷の堂宇のほとんどを失うことになった。

老僧は、あまりの惨状に息をのんだ。

――これほどとは……、

思わなかったからで、茫然と立ちすくんだ老僧を修験者の一団がとりかこんだ。そして崩れた中堂をはさんだ向こう側に、白い装束の別の人群れが歩み寄ってきた。

たれこめた雲のもと、夕闇のようなうす暗さの中に、にじみ出るように現れた白装束の一団は、そろいの〔未敷蓮華〕とよばれる独特の舟形の笠（開ききっていない蓮の葉を具現し、未だ修行の身を示す）を被っている。延暦寺の回峰行者だった。

ふたつの人の群れは、残骸と化した中堂を間に無言のまま対峙した。老僧は、不意に気がついたように顔をめぐらすと、

「法灯は、法灯は無事じゃろうな」

とわめくように言った。白装束の一団は、それには応えず無表情な眼を返した。

「まさか、瓦解した中堂の中ではあるまいの」

根本中堂には、始祖最澄上人いらい灯りつづける〔消えずの法灯〕がある。天台法華の象徴ともいうべき灯明のことだった。

「どうした。応えぬか」

老僧がじれたように怒鳴った。老人らしからぬ逞しい躰にのった大きな顔。横に張った顎とそれに見合う巨大な鼻梁の上に、小さな眼が光っている。その眼をいっぱいに見ひらいて、老僧はさらに応えをうながした。

「いや、幸いにして昨夜のうちに無動寺にお移し申した」

白装束の群れから一人がすすみ出て言った。東塔無動寺は、根本中堂より南にあるが、転げおちそうな急坂をくだった谷底にある。

「ゆえにどんな大風にも、堂宇を損なうことはありますまい。御坊が心配なされずとも、われらにお任せあれ」

と言う白装束の僧の言葉には、そっ気ない冷やかな響きがあった。東塔無動寺は、白装束の一団、回峰行者の本拠であり、老僧の一派とはことあるごとに対立していたのである。

かつて天下人にとって叡山ほどやっかいな存在はない。比叡山を双六の賽とならべて嘆いた法皇がいたり、信長のように業をにやして全山焼討の暴挙にでた例もあった。後を襲った秀吉は叡山懐柔につとめ、家康もまたそれを踏襲したが、叡山封じこめのために、老僧を東塔慧心院の嗣法とし叡山南光坊に住まわせ、天台法華の探題職に推しあげた。

議論の場を統領するという探題職は、衆徒（公卿など身分の高い家柄出身）が襲うのが慣例であったし、まれに庶民出の堂衆が任じられることがあっても、一山大衆と言われる叡山僧すべての支持が必要だった。それを無視したごり推しにも似た探題就任だった。

老僧もまた、その掌握のためにさまざまな手立てを試みたが、容易に叡山はなびかない。しびれをきらしたか老僧は、寛永二年（一六二五）江戸に東の比叡山を建立、東叡山とした。関東天台のみならず全天台宗を管掌しようとしたのである。そんな動きを叡山の僧たちが歓迎するわけがなく、たとえ僧侶の最高位の大僧正に任じられた老僧であっても、叡山はこぞって冷淡な眼をむけた。その急先鋒が東塔無動寺の行者たちだったのである。

いまも嵐のなかにたたずむ二つの集団には、敵意にも似た冷たさが流れている。しかし、中堂の残骸にむけられた視線には、おなじような落胆と失望のいろがあった。たとえ敵対するふたつの集団であっても、おもわぬ叡山の崩壊を眼前にして、茫然とたちすくんでいたのであった。

老僧のちいさな眼は、落胆のためか輝きを失い、針のようにほそめられ建物群の残骸にむけられていた。やがてその眼が、次第にひろげられ徐々に力がこもってくる。ついには頬にかすかな微笑さえうかべた。

——これは天佑である。

と老僧はおもった。千年の伝統を護ってきた叡山が、壊滅の危機に瀕している。そのいまこそが、宿願である宗派掌握の絶好の機会であることにおもい当たったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「衆徒堂衆の方々よ。よくごらんあれ。宗祖以来の根本中堂は瓦解した。のみならず叡山堂宇ことごとく被害を受けた。元亀年間の法敵信長の全山焼討に匹敵する、大事の出来であろうと思われる」

一歩前にでた老僧は、くるりとふりかえると大声で言った。降りつづく風雨に、ともすると声がかき消されそうになる。老僧はさらに大きな声で怒鳴った。

「さてさて、どうなさるおつもりか。復興には多大の金銀が必要となろう。左様、叡山の一山大衆うちそろって、諸国勧進めさる手もあろう。しかし、十年二十年の時がむざむざと過ぎようぞ」

老僧の声は、風雨をついて無動寺行者の一団にもとどいている。しかし返されるのは、依然として冷やかな視線だった。

「よしんば寄進が成功しようとも、果して叡山再興が可能であろうか。江戸が、幕府が許すと思われてか」

と、叱咤するような老僧の言葉がつづく。

「東国に東叡山あり。これを機に天台座主を江戸にお移したまうことになろうやも知れぬ。さすれば、どうなさるご所存か」

行者たちの間に、かすかなざわめきが起こっている。座主を江戸に移されては、比叡山の存在理由はまったく失われてしまい、堂宇の復興が許されるはずがなかった。ざわめきは、はっきりとした動揺となってさざ波のようにひろがった。ちょっと口をとざしてそれを見と

どけた老僧は、さらに力をこめて言う。

「方々、天台は叡山あってのものぞ。比叡山なくして天台宗はなり立たぬ。そうは思われぬか」

その言葉は、行者たちの胸裡にうずまいた願いだった。思わず、おう、と賛意の声があがる。巧みなアジテーションだった。

しかし老僧に煽動する気持ちはなく、心底からそうおもっていた。叡山のない天台宗をにぎったとて、なにほどのことがあろう。比叡山を掌握してこそ宿願が達成されるのだ。

「安心めされい。叡山は不滅である。消えずの法灯は決して移しはさせまいぞ。そしてこの根本中堂を、いや比叡の堂宇をすべて復興させて見せようぞ。この天海にお任せあれ」

と老僧の言葉がつづき、激しい風雨の音をうち消すほどの賛の声が、夕闇の杉木立のなかに地鳴りのようにひびき渡った。

老僧の名を、南光坊天海という。僧籍にありながら徳川家康の信任を得て、家康第一の臣僚として名高い。家康の死後もその地位はゆるがず、十五年後のいまも幕府の中枢に隠然たる力をもっていた。

人は天海を黒衣の宰相と呼んだ。事実、それにふさわしい怪僧であり、このとき南光坊天海が果して何歳であったかも定かではない。

なおも激しく降りつのる雨の中、人々が瓦礫の山に取りくみはじめた。茫然自失の態だっ

た比叡の堂衆山徒が、天海の言葉に勇気づけられて復興に手をつけはじめたのだ。設えた仮小屋の中で、濡れた着衣を替える天海の耳にもその作業のかけ声が聞こえていた。

ところで江戸の幕閣に叡山再興の許可を得るのはさほど難しいことではない。問題は費用のことで、二代将軍秀忠は稀代の倹約家であり、さらにはその意をうけた幕閣に、復興の費用を納得させるのは容易なことではない。と言って勧進の聖を、叡山から発するのでは天海個人の功績とはならず、どうあっても復興資金は天海自身が用意する必要があった。

――やはり、あれしかない。

天海はそうおもっていた。天台掌握は天海の宿願であると同時に、十五年前に死んだ徳川家康も望んだことなのだ。だから、一度は権現様に差しあげたものだが、

――あれを叡山復興に役立てること……、

権現様とて異存があろうはずはない。それさえあれば復興資金などは、たちどころに工面できるのであった。その考えにたどりついた天海の胸裡を、満足感がわきあがるように満たした。そしてそれが頬をゆるませ、気持ちを昂らせてもいた。だから、

「ふ、ふふ。あの権現遺産を掘り出すか……」

そんな呟きがつい唇をついてしまったのだが、濡れた衣を脱ぎかけていた天海は、ふと手を止め、すばやく周囲に眼を走らせていた。しかし激しい雨音がそれをうち消していたようで、誰ひとり耳にした者はいない。天海は苦笑しながら着替えを始めた。

そのとき、粗末な仮小屋の戸が開いて、一人の老爺が入ってきた。僧侶の世話をする山徒

が濡れた着衣を片づけにきたようで、それに気づいた天海は、じろりと鋭い眼を老いた山徒に送った。老爺はぺこぺこと何度も低頭してすぐに小屋から出ていったのだが、手早く新しい衣に袖を通した天海は、

「誰かおるか」

と背後に声をかける。すぐに、はッと返事があり、一人の修験者が姿を現した。

「なにか、ご用でござりますか」

「うむ。いまの男……、衣を持って行った老爺をすぐに始末しろ」

「は？」

「口を塞げと申しておる」

冷酷で容赦のない声だった。中年の修験者は、一瞬その言葉の意味を計っていたが、すぐに残忍ないろを眼にうかべると、お任せくだされい、と言い、尻さがりに退き姿を消した。

戸口から流れこむ青じろい夕靄の中で、南光坊天海がたたずみ声なく笑った。

江戸……。

和田倉御門外の道三堀沿いは、後に大名小路と呼ばれるほど武家屋敷が立ち並んでいる。その道三河岸に沿ったある屋敷で二人の男による会話が交わされていた。密談である。

「権現様の隠し金？　そのようなものが存在するとは、にわかに信じられぬな。苦しまぎれ

に戯言を言うているのではないか」
屋敷の主はかすかに鼻先で笑った。すでに半白の髪であるが、つやつやとした顔のいろ艶や背筋が伸びた様は、立ち上がると相当な体格であろうことを感じさせた。
「何で戯言でありましょう。こと金銀を嗅ぎつけることにかけて、義父の右に出る者はおりませんぞ。この半蔵が義父石見守より確かにうかがったものでござる」
半蔵と名乗った男は、憤然と顔をあげて言った。中背ながら引き締まった躰に敏捷さを秘めているようだ。ただ、沈んだ顔色に埋めこまれた小さな目が、油断なく光りを帯びて酷薄な感じを与えている。
「と言うても、石見守殿が亡くなられたは、たしか慶長十八年のことだ。かれこれ二十年も前の話ではないか」
屋敷の主がやや持て余しぎみに言うと、
「十八年前でござる」
「ん？　いずれにしてもそのように長い間、噂ひとつ聞いたことがないの」
と、やれやれと言った素振りだ。
「それゆえに、価値ある話と思われまする。とかく噂にのぼったものに、ろくなものはありませぬ。大事なことほど、秘されるものでござりまするぞ」
「そのようなこと、その方に教えられるまでもないわ。……うむ。いずれにしても神君家康公の御遺産隠匿とは途方もない話だが、出所があの大久保石見守長安殿とあれば、話として

は面白いな」

屋敷の主は、言葉とは裏腹に詰まらなそうな視線を、薄くらい中庭に向けた。昨日までの雨があがって、さきほどまで眩しい残暑の陽光がさしこんでいたのだが、いつのまにか夕闇が迫っていた。

「でありましょうゆえ、この話、われら伊賀者にゆかりの深い、ご当家に持ち込みました次第でございます」

薄あおい夕もやに染みだすような声で、半蔵が言った。

「力添えせよ、と申すのか」

屋敷の主は、いぜん庭に視線を据えている。

「いえ、御遺産の行方は、われら一統が総力をあげて探索しておりまする。ほどなく判明いたしましょう」

「ふ、ふふ。えらい自信だの。伊賀者の誇りにかけて、探してみせるつもりのようだな」

「むろん、でございます」

「ならば、わしに何を求める。服部半蔵といえば伊賀者の頭領であろう。わざわざわれらの袖の下に隠れることもあるまいに」

「これはお人が悪い。わが服部家は、兄正就（まさなり）の代に勘気をこうむり断絶いたし、この半蔵正重もまた、義父長安曲事の際に三千石を召しあげられおりまする。以来十八年、服部家再興がことを、一日とて忘れたことがない半蔵でございます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton